

以前、ある人から、「イスラムについて知りたい。」と言われて、関係のある映画や本など、いくつか調べることがありました。映画も本も買っていたのですが、十分に意識して見ていなかったのも、その時、いろいろ発見することがありました。

イスラムの聖典は、コーランだけだと思っていましたが、ユダヤ教のモーセ五書と言われる創世記から申命記、そしてダビデの詩編、それに新約聖書の福音書は信徒に読むように勧めているんですね。

ただ、(聖書の伝える)「ノア、モーセ、キリストはみな預言者であって、今度は神様はムハンマド（今までマホメットと呼んでいましたが。）を選ばれた」と言うのです。

マホメットとイスラムの始まりを描いた「ザ・メッセージ」という映画の中では何度も彼らの信仰告白「神は唯一なり。マホメットは神の使徒（メッセンジャー）」が繰り返されます。そして、多神教の町メッカで迫害されたマホメットたちは、一神教である、エチオピアのキリスト教徒の王を頼って、保護してもらいます。その出会いで信仰の問答をするのですが、コーランに描かれたイエス様の母マリアの物語を語る中で、お互いの信仰の重なる部分が多いことなど、ハッとさせられるシーンがたくさんありました。

しかし、今日の福音書は、「ペトロ、信仰を言い表す」という見出しがついている箇所です。これは、イエス様を神の子と告白することが大切なんですが、イエス様の活動の転換点と言える箇所です。

イエス様は、弟子たちを集めて神の国、天国がどのようなところであるのか、弟子たちに教えました。それは、種まきの話だったり、パン種の話だったりしたのですが、その後、この世で神の国を体験させるために、パンと魚を大勢で分け合って食べたり、病人を癒したりしました。すると周りの人々がイエス様の所に押しかけてくるために、弟子たちの教育ができる環境ではなくなってしまいます。

それで、イエス様は、先週の聖書の箇所では、弟子たちを連れて、唯一外国へ行かれたのでした。地中海沿岸の「ティルスとシドン」という町で、弟子たちの教育をしようと思われた時のことが語られていました。イエス様をとっちめようとする律法学者やファリサイ派の人々は、外国人との接触をきらうので、外国の土地までは来なかったのですが、イエス様の力を頼って、この地に住むカナン人の女性が、自分の子供の病気を治してほしい、と訪ねてきました。

最初、イエス様は「自分はイスラエルの失われた羊にだけ遣わされている。」というふうにして、イスラエルという限られたところが御自分の仕事の間であって、その外に出てゆくのは、自分の弟子たちが、使徒として、教会を発展させる時だ、と考えられたからでしょう。しかし、目の前の、必死に願っているカナンの女性の願いを叶えてやった話でした。

イエス様の、弟子教育は、大体今日の箇所ですべて終了し、この後は、エルサレムへのぼって、贖いの業を完成させ、十字架に架かるため、まっすぐに都を目指して旅をされることになります。

そういう意味で、今日の福音書で、イエス様が質問された言葉は、弟子たちが、イエス様の教育を受けて、使徒として働いてゆけるかどうか、教育のおさらいである試験をされたこと、ととらえるのがいいと思います。

その試験というのは、イエス様が何者なのか、イエス様が来られた目的を、弟子たちが理解しているかどうか、ということでした。

最初は一般的な質問をされました。「人びとは、人の子のことを何者だと言っているか」というものでした。この質問は、その後の、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」という、本当の試験問題をするための準備問題みたいなものです。

弟子たちは、人々が「洗礼者ヨハネ」「エリヤ」「エレミヤ」「預言者の一人」などという世間の評価を伝えます。それらは、神様から遣わされた立派な先生、宗教家という評価です。

しかし、その後の質問をすることで、弟子たちは、もっと違う理解をしているかどうか、確認しようとしておられるんですね。

その質問にペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えました。

2週間前、ここで、イエス様が、湖の上を歩いた物語を読みましたが、あの時、ペトロもイエス様の方に向かって、少し水の上を歩いたんですね。そして、そのあと、沈みかけたのを助けていただき、二人が舟に乗り込むと、ペトロ以外の、舟の中にいた人たちが「本当に、あなたは神の子です」と言っていました。もう、このような体験で、弟子たちには、「イエス様は、単なる宗教家ではなく、神様の所から人類を救うために来られた神の子だ。」という経験があったのでしょうか。

そして、今日のところでは、ペトロが代表して答えるわけです。

そうすると、イエス様はその答えを大変喜ばれ、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」とか、「陰府の力もこれに対抗できない。」、また、「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。」と言われたのです。

これを根拠にして、カトリック教会は、ペトロを、初代のローマ教皇（一般に言われるローマ法王）に位置づけているのです。

実は、この時点では、厳密に言えば、教会はできていません。イエス様が天に昇られたあと、10日して、聖霊が降った時、弟子たちは力を受けて、イエス様が、ご自分は自己限定して、出てゆかなかった外国にも、弟子たちは伝道に行けたのでした。だから聖霊降臨日を教会の誕生日とよぶことがあります。

このペトロの信仰告白は、他のマルコやルカの福音書でも出てきますが、イエス様は、それに対して教会の話や天の国の鍵の話はされてはいません。これらの話は、このマタイによる福音書を書いた人が、自分たちの理解する信仰を、イエス様の言葉として独自に作ったものです。

それじゃ、嘘なのか。これは勝手に作ったものだから削ったほうがいいのか、ということになるのですが、そうではないでしょう。

この福音書を作った人々は、「ペトロを教会のリーダーに祭り上げよう、」という目的ではなく、たくさんの迫害が起こって、あちこちで細々と信仰生活をしているクリスチャンたちに「イエスを、メシア、生ける神の子」と信仰告白する人びとの集まりは、どんなに小さく弱くても、そこそが教会であって、陰府の力もこれに対抗できない、と励ましている、ということを書いたかったのだらうと思うのです。

今日の特祷は、「教会は主の助けによってのみ健全に立つことができます。どうか絶えることのない助けをもって主の教会を清め守り、恵みと力によっていつまでも堅く保ってください。」と祈ります。キリスト教迫害の時代に、マタイによる福音書を作った人々の信仰に通じるものでしょう。

私たちの教会は、10年に一度の屋根の塗装工事をしなければならない、と思っている所へ、昨年10月1日、礼拝堂のクーラーが壊れて、そちらの方が優先になり、分担金などとても教区の要請には答えられません。もう今年の分担金を最後まで送るためには、納骨堂資金を一時借用しなければならないかもしれません。

そんな中で、教区の多くの財産を使って福岡に新しい建物を建てようとしてきた、ところが、着工の直前になって、自分たちの計画したものが、実際にはそれを建てるための3分の2程度しかお金が用意できないということで、半年以上延期になりました。4月からの延期ですから、10月以降に着工するために準備しているのでしょうか。

しかし、各教会の窮状を見ていながら、強行して建物を建てることに、私は最初から反対でしたので、どのようにこれから教区は運営をしていくのか。機会があれば、意見を述べたいと思うのです。

ルカ福音書の14章に、塔を建てる話に続いて、2万の兵隊を迎え撃つのに1万の兵隊で勝てるかどうか。もし迎え撃つことができないとわかれば、敵が遠方にいる間に、使節を送って和を求めるだろう、と語っています。

ただ国語的に「感情」だけに押し流されるのではなく、冷静に算数的な「勘定」をして、賢明な判断をすることが求められています。

聖書は、計算したり、考えたりすることの大切さをこの箇所で教えているのです。

私たちの信仰告白が、他人の意見に振り回されるのではなく知性や理性に裏打ちされた、自分自身の意志、考えで主体的に答えて行く者でありたいと思います。